

足尾で植樹を呼びかけた時、第1回目は現在も植樹をしている大畑沢緑の砂防ゾーンであった。2回目は松木溪谷の奥のほうに設定したのだが、現場に行くまでに危険がともなう。万が一大雨が降ったら、鉄砲水が出る。だから松木溪谷に植えたのは1回だけで、3回目からは松木溪谷入口の大畑沢緑の砂防ゾーンに戻る。第11回目の2006年も同じところで植えている。斜面はどんどんきつくなる。階段を登って相当高いところに行かなければ、植樹はできない。4月の植樹デーには1300人も人がくるので、一気に階段を登ることができず、階段の登り口にたまってしまふ。これが問題である。

「足尾に緑を育てる会」では、100万本を植えようと目標を立てた。11年かかって達成したのは、ほぼ3万本である。100万本を植えるためには、この調子でいけば、1年で3000本を植えるとしてあと320年はかかるという計算になる。なんとも気の長い話ではないか。



見渡しているかぎり、植える場所は無限だとも思えるのだが、実際はそうはいかない。足尾の大部分の土地は銅山が所有するので、勝手に植林をしてもいいというのではない。今植えているのは、水源涵養(かんよう)のために国土交通省が管理している土地である。しかも、植林ができるように、基盤整備されていなければならない。人がどこにでもはいついていいというものではないのだ。足尾の山はガレ場が多く足元が崩れるので、簡単には登ることができない。植樹デーには千数百人がきて、老若男女がいるから、彼らの安全も確保しなければならないのである。足元を整備しなければ人は登ることもできないし、植えても崩れてしまふ。

どこにでも植えられそうに見えても、実際に植えることができる場所は限定される。植樹デーで多数の人に植樹してもらうためには、どうしても前もっての準備が必要なのである。私は植樹デーには必ず参加するにせよ、どうしても地元に住んでいるメンバーに緑の下の負担がかかる。

足尾の植樹が世間的にも注目を集めてくるにつれ、修学旅行の生徒や職場から、日光などの観光地への行き帰りに樹を植えたいとの申し込みがくるようになった。もちろん大歓迎ではあるにせよ、そのための苗木の準備をし、植える場所の整備をして、スコップなどを用意し、当日は植樹の指導をしなければならない。それもすべて地元の会員の負担になってしまうのだ。

ボランティアを強請することになるのだが、過重なことはできない。そのために「足尾に緑を育てる会」をNPO法人にし、植樹を申し込んだ学校や職場や労働組合には多少の参加費を負担してもらい、当日世話のために出てくれた会員には世間並には遠くおよばないにせよ、少しの日当を払うことにした。

足尾の植樹活動がさかんになるにつれ、これまでしなくてもいい苦勞をしなければならなくなってきた。社会化されるとはそういうことなのだろう。06年もまわりを見ていると、朝から晩まで駐車場の整理をしていた仲間がいた。山に登る人を整理するため、一日中ハンドトーカーで叫んで声をからしている仲間もいた。しかも、会員は1週間前から資材を運び上げ、テント張りをし、植樹が終わると後片付けをする。私などは樹を植えさせてもらっているにせよ、一本も植えられない仲間も多い。

現実はこのように雑用ばかりが拡大していくのだが、私たちはできるだけ多くの人に足尾にきてもらいたいと願っている。ボランティアの集まりの「足尾に緑を育てる会」は、ボランティアを世話するボランティアになっているのである。

私はこの運動がはじまった最初の頃を、なつかしく思い出す。仲間うちで花見をするための桜を植えようと、10本ほど植樹をした。その樹がすべて枯れてしまったことが、本気で植樹をしようという発端であった。

4月の第4日曜日を植樹デーと決め、10人ほどの仲間と植林を呼びかけた。その仲間とは、もう30年以上も足尾鉱毒事件や田中正造について学んでいる。田中正造がやり残した、治山治水や源流域の保全をやるだけやろうという気持ちもあった。

その時の呼びかけは、シャベルと唐グワと土と苗を持ってきてくださいというものだった。昼食、軍手、雨具は個人で用意し、できたら会員になって会費 1000円を納めてほしいというのである。つまり、私たちには元手は気持ちだけしかなかったということだ。

ある日、植樹予定地の大畑沢線の砂防ゾーンに、田んぼの土がダンプで2台分積んであった。土にはナラやブナの苗がささっている。名を名のらなかつたので、誰がやったのかわからなかつた。不気味な感じさえもしたものだ。

日本昔話にでてくる六地藏が、わざわざ土を運んできてくれたような気がした。あとから誰がやったのかわかり、自分で田んぼの土を掘って持ってきてくれたとのことだったが、私は本当に慈悲心あふれる六地藏が担いできてくれたのだと思っている。

こんな活動をしていると、人の情に触れることがしばしばある。会場で毎年顔を合わせる家族がいて、子供が目に見えて大きくなる。11年目の今年は、最初の年に植えにきてくれた10歳の 子供が、21歳の青年になっているということだ。

私は心に樹を植えまじょうと、毎年あいさつをしている。心に植えた樹は、山に植えた樹と同じように、どんどん育っている。心の樹は間違いなく育っていくから、みんなは毎年集まってくれ、しかも人数が増えていくのだろう。山に植えた樹も、私たちの予想を遥かに超えて、根が活着している。すべてはうまくいっているのだが、100万本にはまだまだ遠いのである。

ways2007年 春